１．いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009作成の趣旨

今回、「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2000」が改訂された。

国のレッドデータブックに続いて1990年代の後半から、全国の各自治体のレッドデータブックが次々に作られ、それらが現在、第二回、第三回の改訂時期を迎えている。今回の石川県の改訂もその流れのひとつであるが、なぜ今、このような改訂が必要になったかについて、その要点をまとめておく。

レッドデータブックというのは「絶滅のおそれのある野生動植物」を選定してまとめたレッドリストの解説版である。

これが全国の多くの自治体で編纂されるようになったのは、各地で行われている開発工事の際のひとつの基準を作るための基礎資料の意味からであった。とくに全国版では、各地に特有の事情を含めて、個々の地域における具体的な保全対策には直ちに対応できないという限界があった。それらに対応するためにこの地方版が作られたのである。それ以来、ここに載せられている種類が開発の対象となっている地域に生息しているかどうかによって、工事の内容に変更を必要とするか否かが決められるようになった。それは開発が引き起こす自然への悪影響を制御するうえで一定の役割を果たしてきた。

しかし自然環境も社会環境も時間とともに変化してゆく。ある時点で決められた基準がいつまでも有効であるとは言えない。先に作られたレッドデータブックについても、幾つかの点で不十分なところが出来てきた。それが今回の改訂を必要とする主な理由となっている。

それを列挙すると以下の諸点である。

(1) 野生動物に関する知識の増大

野生動物と野生植物の大きな違いは、野生動物の種類が植物にくらべて非常に多く、さらに小型の種が多いだけでなく、活動時期や時間が多様であるためにその実態調査が困難でまだ判っていない点が少なくないことである。現在、石川県に生息していると考えられる野生動物は5万種を越えると推定されるが、種名が確認されているのはその半数にも達していない。

しかし県内で活動されている多くの専門家あるいはアマチュアの研究者によって、この10年近くの間に多くの種の生息が新たに確認され、またその分布状況も明らかになってきた。それによって全国的に希少であって保全しなくてはならない種が見いだされてきた。これらをレッドデータブックに追加する必要ができてきた。

もちろんこれで完全なものではなく、さらに希少な種の探索、追加の努力は今後も続けられなくてはならない。

(2) 里山・里海で人と共存している野生動物の重要性の確認

ここ20年の間に日本の自然環境を考える視野が大きく開けてきた。それは「里山」という言葉に表される、歴史的に人間生活とともに出来上がってきた野生生物相の重要性が認識されたことである。かつては全く人間の手が入らない原生の自然が最も貴重なものであり、人の手が入った二次的な自然は、原生の自然が劣化したものであるという見方が浸透していた。それに対して、後氷期以来の人間の生活・産業活動が作り上げてきた自然環境が、原生の自然に劣らず重要であるとの認識が生まれてきた。人間の自然環境の利用から始まった生活・産業活動が、野生動植物の種類や生息状況を大きく変えた。これは人間の一方的な働きかけだけではなく、野生動植物の反応をも含めた自然環境の再編成である。日本のように温度と水に恵まれたところでは、現在の自然環境はほとんどが古代からの人間生活の影響を受けている。それは現在でも自然と人間活動の微妙なバランスによって維持されている。保全を必要とし

ている多くの動植物種は、人手の入らない原生の自然の中よりも、このような場所で存続し維持されていることが判ってきた。石川県の特徴的な動物であるハッタジュズイミミズは、深い湿田という人間が作った環境で生存してきた。

里山・里海のような環境で生息している野生動植物は、従来と同じ人間の管理が続けられていることが、種の存続にとって大切である。

(3) 外来の動植物によって大きな影響を受ける種の保全

原生の自然も、「里山・里海」のように人間活動とのバランスによって維持されている自然も、それぞれに長い年月を経て成立した生態系のなかで種を存続させている。この長い年月の調整を経て生存している動植物の種にとっては、新しく侵入した天敵や競合種は大きな脅威となる。もちろん長い進化の過程ではこのような外来種による生態系の攪乱と再調整は、繰り返して行われてきた。しかし最近数十年の人間活動によって、これまでになかったような大規模かつ急激な外来種の侵入が起こってきた。これは日本の自然生態系の維持そのものの問題であるが、とくに打撃を受けやすい種について判定して、速やかな対応をとらねばならない。絶滅を危惧される種を判定する基準には、この視点からの検討が重要になってきた。

(4) 現在も続いている開発

これまでの野生動物の保護は、種そのものの採取・利用の制限と同時に、生息環境の破壊による減少、絶滅にどう対処するかが重要であった。現在、人間活動と自然の複雑な関係が次第に明らかになってくるとともに、上述の(1)～(3)に述べてきたような問題が新たに取り上げられた。しかし環境に対する配慮が不十分なままに行われる開発による直接・間接の自然破壊はいまも継続している。さらに環境産業という新たな分野からの自然の改変が問題となってきた。それらの技術は一面では環境改善に役立つが、規模が大きくなると野生動植物とその生息条件に大きな影響を与える。世界的に大きな問題となっている地球の温暖化や不安定化はその最大のものであるが、地方のレベルでも都市開発、道路や河川の改修、大規模な農地改良など昔ながらの開発による野生動物の生息環境の破壊、乱獲などの問題は続いている。これらについては従来以上に注意しなくてはならない。

「いしかわレッドデータブック〈動物編〉2009」では、石川県の絶滅を危惧される希少な動物のリストであるとともに、哺乳類、鳥類、以下それぞれの動物群について県内の現状に詳しい担当者の総括的な解説が述べられている。これを通読すれば石川県の野生動物についての最新の知識を得ることができる。なお、このデータブックの特徴として、浅海域に生息する藻類を含む動植物がまとめて取り上げられている。対馬海流の影響を大きく受けている能登半島を持つ石川県の生物の特徴がここによくあらわれている。

今回の改訂の主要な点は次の３点である。

1) 2000年の作成にあたって取り上げられなかったが、その後の調査研究の進展によって新たに見いだされた希少種の追加
2) 前回はまだ絶滅が危惧されなかったが、県内の自然環境の変化によって生息数の減少あるいは生息環境の悪化が目立っており、放置しておけば絶滅の恐れが大きくなったものの追加
3) 前回はまだ調査が不十分であったために取り上げることが出来なかった陸産貝類および淡水産貝類などの動物群を追加

（大串　龍一）